

我輩は鹿である

ぎふ国際高校 1年 高橋 紗優菜

鹿せんべい、好きですか？

私はごく普通の奈良の鹿でございます。我輩と書きましたものの、猫とは無縁の物であります故。今日も公園にはたくさんさんの飯やり人で賑わっております。

「ねえねえ鹿さん、あの人間、先程おせんべいを買おうと仰ってたわ」

「ありがとうございます」

鳩夫人は噂が好きなのか、いつも私に人間の事を教えてくださる。私は早速仲間を連れて、その人間のもとへ参りました。

鹿せんべいください

人間がそう言うまで、私は決して近づきません。若いもんや強欲爺は店に寄っただけでも早々と向かいますが、私はその言葉を聞くまで待つのです。

「鹿せんべい下さい」

人間がそう言います。そこで私はすかさず、

「鹿せんべいだ、走れー！」

仲間たちに合図し、叫ぶのです。どの鹿にも鹿せんべいを求めるチャンスは必要だと私は考えております。ですから、私は毎度叫んでおります。

「鹿せんべいを食べるまで、私は戻らん！」

角を切られた私たちは、こうして押し合いへし合いするしかございません。鹿の世界も、なんだかんだと競争社会です。

人間と言うものは、鹿に餌を与えるくせに、いざとなると怖がって捨ててしまいます。そんなおぼれも私どもは大好物なのですが、あれは食べにくくていかんです。顔と顔がぶつかり合い、暴言を飛ばして必死に食らいつく。

そう、鹿せんべいを食べると言うのは、戦争なのでございます。

「とつたー」

私は鹿せんべいを一枚啜えると、そのまま走りだしました。どこの鹿の骨とも分からん奴に、これを取られるのはしゃくであります。ある程度離れてから、私はたった一枚の鹿せんべいを味わって食べました。

しかし、私は気づいたのです。恋敵である鹿夫の嘲笑した目を。鹿夫は私よりも四枚多く持つておりました。そう、鳩夫人は鹿夫のスパイだったのでしょう。鹿気のない場所で人間が鹿せんべいを持つてやってきて、鹿せんべいを独り占めにしたのです。鹿夫という鹿は、そういう鹿なのでございます。実に下衆で、実に意地の悪い……

私は嫌気がさし、そのまま公園をぶらぶらと歩きました。

「あら。鹿さん」

「やあ、鹿子さん」

鹿生というのは誠に上手くできているんですね。私はこの公園で最も美しい女鹿の鹿子さんと会いました。つぶらな瞳に美しい毛並みは、思わず目を引きます。

「鹿せんべい、頂けませんでした」

「それは残念ですね……私が持つてきて差し上げます」

私は張り切つて、鹿子さんの為に人間を探しました。しかしながら、鳩夫人のようにはうまくいかず、私はしぶしぶ鹿夫のもとへ四本足を運びます。

「鹿夫、悪いが、私にも一枚分けてくれないか」

鹿夫は嫌らしい顔をしながら三枚も残して、こういいました。

「君はさつき食べていたではないか」

「どうしてもだ、頼む」

「嫌だね」

私は彼の性悪さに腹が立ち、そのままぶつてくされてとぼとぼと鹿子さんのもとに帰ることにしました。

「鹿子さん、君のために持つてきたよ」

憎たらしい声が聞こえます。なんと、鹿子さんのもとに、あの鹿夫がいたのです。

「まあ、三枚も？　ありがとう」

とてもいやな気持ちでした。胸が張り裂けそうです。私は思わず逃げ出してしまいました。胸の痛みには耐えきれず、私はうつむきながら静かに歩きます。

「お腹が空いているの？」

人間の少女が、私に声をかけました。私は返事をする気にもなれず、そのままうつむいていました。

「はい、一個しかないけど、あげる」

仄かに漂う香ばしい鹿せんべいの匂い。今日だけは、仲間に伝えなくてもいいだろうか。私は生まれて初めて、そう思いました。そつと鹿せんべいを啜え、少女にお辞儀をしながら、私はダメもとで鹿子さんのもとへ向かう事にしました。

これを受け取ってもらえないのなら、私はもう、鹿子さんの事を諦め、彼女のもとから去りましょう。

勇気を踏み出し、鹿子さんのもとへ参りました。

「やあ、鹿子さん」

「あら、鹿さん」

喜ばしいことに、鹿夫はおりませんでした。

「貴方のために、この鹿せんべいを、捧げます。そして、私と夫婦になってください」

私は鹿せんべいを彼女の足元に置きました。夫婦になつて欲しいだなんて言うつもりはみじんもありませんでしたが、自然に口が滑つてしまったのです。

「まあ」

彼女は美しい唇を、鹿せんべいに近づけました。そして、細長い舌で鹿せんべいを口に運び、ゆっくりと味わいます。その姿に、私は再度恋に落ちました。

「…返事を、聞かせて下さい」

鹿せんべいを食べ終わった彼女は、みずみずしい顔つきで、にこりと笑い、頷きました。

「ええ、喜んで」

彼女は嬉しそうにそう言って、私の顔を舐めます。ふんわりと、彼女の甘い香りと鹿せんべいの匂いが混ざっております。

私はこの美しいにおいを、幸せの匂いだと感じたのでした。